

人造人間殺害事件

海野十三

青空文庫

その早そうぎ暁よう、まだ明けやらぬ上シャンハイ海の市街は、豆スープの
 ように黄色く濁った濃霧の中に沈ちんでん澱でんしていた。窓という窓の厚
 ぼつたい板戸をしつかり下おろした上に、隙間隙間にはガーゼを詰め
 ては置いたのだが、霧はどこからともなく流れこんできて廊下の
 曲り角の灯あかりが、夢のようにボンヤリ潤うるみ、部屋のうちまで、上海
 の濃霧に特有な生なまぐさ臭くさい匂においが侵入していたのであった。

その日の午前五時には本部から特別の指令があるということ
 同志の林田橋二はやしだはしじからうけたので僕は早さつそく速そく、天てんじ井じょう裏うらにもぐ
 りこみ、秘密無線電信機ダイヤルの目盛盤メスケを本部の印のところにまわした
 ところ、果して、一つの指令に接した。こんどの指令は近頃にな

い大物だ。

J I 三ハ直チニ海龍俱樂部かいりゆうくらぶ 副首領「緑十八」ヲ殺害スベシ。但シ犯跡ヲ完全ニ抹殺スベキモノトス。本部J M 4指令。

この意味を、暗号電文の中から読みとつたときには、常にも似ず、脳髓がひきしめられるような気がした。緑十八といえば、秘密結社海龍俱樂部の花形闘士の中でも、昨今中国第一の評ある策士。辣腕らつわんと剽悍ひょうかんとの点においては近代これに比肩ひけんする者無しと嘆たんぜられているひと。しかしいつも覆面しているので顔も判らず、又平生へいせいは、どんな生活をしているひとなのだか、それも殆んど判っていない。一体、この海龍俱樂部は、表面は一秘密結社ではあるけれども、その背後には某大国の官憲の庇護ひごがあり、

上海の警視庁と直通しているといわれ、何のことはない、某大
と中国警察との共同変装のようなものである。だから、その海龍
倶楽部の副首領を暗殺するということは、非常に困難なことであ
り、危険さから云つても自ら爆弾をいだいてこれに火を点けるよ
うなものである。暗殺行為の片鱗へんりんが知られても、僕はこの上海
から一步も外に出ないうちに、銃丸じゅうがんを喰らつて鬼籍きせきに入らね
ばならない。

「おい井東いとう」と同志林田が、天井裏から青い顔をして降りてきた
僕に、心配そうに呼びかけた。「こんどの指令は、大分大物だいぶんらし
いね。僕は君のためにあらゆる援助をするようにと本部から指令
されてきた。なんでもするよ」

僕は忠実なる同志の方に振り向こうともせず、無言の儘まま、寝椅子の上に腰を下した。五分か、十分か、それとも一時間か、時間は意識の歯車の上を外れてはず、空廻りからまわをした。僕の脳髓は発振機のように、細かい数学的計算による陰謀の波動をシユツシユツと打ちだした。

計画は出来上った。林田を自分の寝椅子の方に手招きてまねすると、その耳に口をあてて、重要な援助事項を、簡潔に依頼した。林田の赤かった顔色が、見る見るうちに蒼醒あおざめて、話が終ると、額ひたいのあたりに滲にじみ出た油汗でが、大きな滴しずくとなつてトロリと頬ななめあごを斜に頤あごのあたりへ落ち下さがつた。

「井東！」と林田が、また懐なつかしそうに僕の名を叫んだ。

「今度は所詮しよせん、お互に助かるまいな」

「……」僕は顔を静かにあげて微笑してみせた。

「うふふ」林田も笑った。「君はいつも自信のあるような顔をして
いるじゃないか。だが、この前のF鉾山事件といい、この間の
しょうどう

松 洞 事件といい、某大国や警視庁は、あの 兇 行きようこうを君がや

ったことはよく知っているのだぜ。唯ただ、犯跡はんせきが明白にわからな

いのと、君が前から海龍倶楽部の一員として活躍し相当彼等のた
めにもなっているところから、たとえ間諜スパイでも今殺すのは惜しい

ものだと躊躇ちゆうちよ躇ちよしているのだよ。だが今度の暗殺事件が、ちよ

つとでも下手に行こうものなら、直ぐ様すさま、彼奴等きやつらは、君の自由を

奪ってしまふだろう。ところで、今度の大将は、中々したたかも

のだ。まず君は引導をわたさされていると考えてよい。つまらない自信だが、僕も骨を曝すつもりでいるよ」

同志は大変悲観をしていた。が、悒鬱ではない。僕達の特務も、このたびが仕納めだと思うと、湧きあがってくる感傷をどうすることも出来ないであろう。

だが僕は、呼吸の通っている間は、常に大きな希望を持っているのだ。敵が青龍刀を僕の頭上にふりあげたとしても、僕はその刃が落ちて来るまでの僅かな時間にまでも希望を継ぐことであろう。運さえ悪くなければ、そのとき誰かが窺いよつて、その敵の胴腹に銃弾をうちこんでくれるかも知れないのであるから……。

況いわんや僕等には敵に対して、武器以上の武器がある。そいつは、
サイエンス科学である。海龍倶楽部の団員やその背後にある政府筋すじや某

大国の黒幕連くろまくれんなどは、政治手腕はあり、金や権力もあるであろ

うが、要するに彼等は科学的には失業者に過ぎない。僕等は生活

様式や境遇は失業者に違いないが、一ひとたび度、ハンマーを握らせ、

スイッチ・ボード配電盤の前に立たせ、試験管と薬品とを持たせるならば、

彼等の度胆どぎもを奪うことなどは何でもない。彼等を征服するには、

科学が武器である。科学サイエンス！ 科学サイエンス！ 彼等の恐怖の標的

である科学を以てその心臓を突いてやれ！

僕はそこに見当をつけて、同志に指令を与えたのだ。扉ドアを押し

て帰って行く林田橋二の後姿が、人ロボット造人間のようにガツシリして

見えた。

僕は午前九時になると、いつものように職工服に身を固め、ア亜細亜製鉄所の門をくぐり、常の如く真紅まっかにたぎった熔鉄ようてつを、インゴットの中に流しこむ仕事に従事した。焦熱地獄しょうねつじごくのような工場の八時間は、僕のような変質者にとって、むしろ快楽園らくえんであった。焼け鉄の酸すっぱい匂いにも、機械油の腐りかかった悪臭にも、僕は甘美かんびな興奮そそを唆そそられるのであった。特務機関をつとめる僕にとっては、このカムフラージュの八時間の生活は、休憩時間として作用してくれる。

夕方の五時になると、製鉄所の門から押し出されて、隠れ家の

方へ歩いて行つた。一丁ほども行つて、十八番館の煉瓦塀れんがべいについて曲ろうとしたとき、いきなり僕の左腕さわんに、グツと重味がかかつた。そしてこの頃ではもう嗅かぎなれた妖氣ようき麝じや香かうのかおりが胸を縛るかのように流れてきた。次に耳元に生なま温あたい呼吸いきづかいがあつた。

「井東さん。こんばんワ」

「こんばんは、劉夫人りゆうふじん」

「劉夫人と仰おっしゃ有あらないで……。いじわるサン。絹子きぬこと、なぜ呼んでくださらないの！」

「劉夫人」僕は、顔をはじめ曲げて彼女の桜桃さくらんぼのようにな気あした、まんまるな顔を一瞥いちべつした。「僕は、あなたの餌食えじきにな

るには、あまりに骨ばっています。もっと若くて美しい騎士たち

が沢山居ますから、その方を探してごらんになつてはどうですか」

「貴方は、すこしも妾わたしの氣持を察して下さらない。貴方と同じ国

に生まれたこの妾の氣持がどうして貴方に汲くんでももらえないのでしようかしら。こんな遠い異国に来て、毎日泪なみだで暮している妾を、

可哀想だと思つては下さらないのですか。妾は恥を忍んでまで、祖国のためになることをしようと思つているのですのに」

「そいつは言わないのがいいでしょう。情痴じょうちの世界に、祖国も、名譽もありますまい」

「貴方は、今晚はどうしてそう不機嫌なのです。さあ機嫌を直して、今夜こそは、妾のうちへ来て下さい。主人は今朝、北の方へ

立ちました。一週間はかえつてきますまい。さあこれから行きましよう。ネ、いいでしょう井東さん。絹子の命をかけてお願いしてよ」

このしつっこい色しきじょうふじん情夫人には、もう三十日あまりも纏まといつかれていた。僕のような肺病やみのどこがよくて誘われるのであろうかと不審にたえない。しかし神経的に考えてみれば思い当らぬところがなくてもないので、それは多分しきどう色道の飽食ほうしょく者である夫人が僕の変質に興味を持っているのであるか、それとも、ひよつとすると、同志林田の指摘したように僕の身しんぺん辺を覗ねらう一派の傀かい儡らいで、古い手だが、色仕掛けというやつかも知れない。もしそうだとすると、この劉夫人は容易に僕から離れては呉くれな

いだろう。だが夫人にあまり付きまとわれては、こっちの仕事が一向にすすまなくなるわけだ。こいつは高飛車たかびしやに出て、一遍で夫人を追い払うのがいいと思つた。幸いさいわ、今夜の海龍倶楽部の会議迄には一時間ほどの余裕があつた。

「夫人、では一時間だけお伴をしましょう」

「えッ、行つて下さる。まあ嬉しいわ」夫人は少女のように雀躍こおどりしてよろこんだ。「そこに自動車が待たせてありますの、さあ、早く行きましょう」

夫人が左手をあげて相図あいずをすると、路傍に眠つていた真黒なパツカードが、ゆらゆらとこちらへ近付いて来た。僕たちの乗つた自動車は、真暗な商館街にヘッド・ライトを撒きちらしつつ走つ

て行つた。二十五番街へさしかかつたとき、警告もなく、もう一台の自動車が、後から追いついて来て、いきなり窓と窓とを向いあわせて並列^{へいれつ}疾走^{しつそう}をはじめた。僕は腰のあたりに爆弾をうちつけられたような無気味^{ぶきみ}な寒気に襲われた。もう三十秒これがつづいたならば僕は運転手を射殺しても、この車から外へ飛び出そうと決心した。

「劉夫人！」

僕は夫人の両手を執^とつて、ひきよせた。恋の抱擁^{ほうよう}と見せかけて、夫人をこの危急の際の仮の防禦物^{ぼうぎよぶつ}にしなければならなかつた。十秒十五秒――。向い合つた自動車の窓がスルリと開く。

「呀^あッ」

叫んだのは劉夫人である。夫人は僕からとびのいて背後うしろに隠れようとした。——その窓から現われ出た奇怪な顔。眼も唇も、額も頬もすべて真黒な顔。黒人か、さにあらず、構成派の彫像ちようぞうのような顔の持主は、人間ではなくて、靈魂れいこんのない怪物のような感じがした。そのとき夫人の右手が、のびると見る間に、硝子ガラス窓越しに、短銃ピストルが怪物に向つてうち放された。怪物は真正面から射撃されて、その顔面がんめんを粉碎ふんさいされたと思いきや、平気な顔をつき出して、

「三十番街を左に曲れ」

と流暢りゆうちような中国語を発し、驚く僕たちを尻眼にかけて、背後うしろの方へ下つて行つた。

夫人は、短銃を壊れた窓に、なおも覗いをつけつづけていた。

「なんででしょう、あの怪物は？」夫人が蒼白な顔をあげて、キツと僕の方を睨んだ。

「多分、人造人間かも知れませんね」

「人造人間！ 人造人間って、ほんとにあるのですか」

「ありますとも。このごろ噂が出ないのは各国で秘密に建造を研究しているからです」

「いまのは、どこの人造人間でしょう」

「さあ、どこでしょうか、もしかすると……」

「もしかすると……」

「運転手、三十番街を左に曲れ。真直走ると殺されちまうぞ」

僕は圧おしつけるように命令した。車はもう三十番街に来ていたの
で、四よつ角かどを急角度に旋回した。その途端とたんに、僕たちの車の後に
迫おっていた高速度のイスパノ・シーサなどの車が数台、三十一番
街すべに滑りこんだ。俄然がぜん一大爆音が彼等の飛びこんだ方面に起つた。
僕たちの車の硝子ガラスが、護謨球ゴムまりをたたきつけたかのようにジジーン
と音を立てた。

何事か起つたらしい。この儘まま、通りすぎたものか、引きかえし
たものか。先刻さつき、窓からのぞきこんだ人造人間ロボットらしきものは、同
志林田が活動を開始したのを語っている。三十一番街の爆発事件
も、彼の手で決行されたものに違いない。だがその地点に、そん
なに必要な事件を指令した覚えはないので、鳥渡ちよつと、事件を解釈

するのに見当がつかなかった。これは引返して、様子を見たいものだ、と思つたが、劉夫人は、僕の胸にピッタリ顔をおしつけて離れない。彼女は、なんでも自分の家に連れて行くことばかりを考えているのに違いない。僕は、象牙のように真白な夫人の頸筋じに、可憐かれんな生毛うぶげの震ふるえているのを、何とはなしに見守りながら、この厄やっかいもの介者から、どうして巧くのがれたものかと思案しあんした。

「止め《ストップ》！ 止め《ストップ》！」

自動車の前に立ちふさがつた数名の兇きようかん漢がある。

「また、出たかな」僕はつぶやいた。夫人はすばやく身を起した。夫人は短銃ピストルを握り直したが、僕はなにも持つていかなかった。武器を持つのは、いよいよ最後のときに限る。軽率けいそつに武器をとり

出すことは、できるだけ避けたい。ことに先程から、劉夫人の敏びんしょう捷しょうなる行動に、ひそかに不審をいっていた僕は、ことさらに自分の武器を秘密の隠し場所からとり出すところを夫人に見られなくなかった。自動車の速力がすこし落ちると、兇漢の一人がとびのつて、運転台の窓をひらいて、こつちへ顔を向けた。それは、案に相違して、林田でも、又他の同志でもなく、全く知らない中国の顔だった。

「夫人にお願いがあります。重傷者ができましたから、この車をちよつと鳥渡はいしやく 拝はいしやく 借か したい」と中国人は丁寧ていねいに、だがお 押しつけるような口の利き方をした。

「失礼な！ お断りします」夫人は負けてはいなかった。

「どうかお許し下さい、劉夫人、病人は唯今手当をしませんと、手遅れになりますから」

劉夫人と名をさされて、夫人の態度がちよつとかわつた。

「お前はだれだい。病人は何処どこの人だい」夫人が、俄にわかに伝法でんぼうな言葉を吐いた。

「やんごとないお方でございます。私は現場から、電話をうけとつたものです。おお、御病人の担架たんかが見えました」

なるほど、いつの間にか、十名ばかりの中国人や西洋人が一つの担架を守って、車外にかたまっていた。だが彼等の誰もが、自動車自動車の存在などに気がつかないかのようになり、顔をそむけていた。

僕は、夫人が、その負傷者に充分心を引かれているのを見抜いた。

ので、別れるのは今だと思った。しずかに挨拶あいさつすると、夫人は
 気の毒そうな顔をして、

「明日は是非おいで下さい」

「もし命がございましたら」そう言つて僕は大胆に夫人の頸くびを抱
 えてその唇を求めた。そのとき僕の右手は、夫人の左の手首から
 三センチメートルばかり上を握りしめた。氷のようにつめたい瘦
 せた手首だった。しかし象牙のようになめらかな手ざわりだった。
 その手ざわりをなつかしんでいると見せて、その部分に施ほどこされて
 いる隠し文いれずみ身を、指先の触覚だけで読みとることを忘れなかつ
 た。いや、そればかりではない。あと十二分すれば、極めて正確
 に夫人の身体に、ちよいとした変化が起るような薬品をその皮膚

にすりこむことにも美事みごと成功したのであった。

僕が下りると、顔中に繃ほうたい帯をした男が、自動車の中に担かつぎこまれた。四十をいくつか過ぎたと思われる長身の西洋人だった。

「今は何時になるか？」

その声音こわねは、重症の病人とは思われないほど元気に響いた。

「五時三十五分です、閣下かつか」

さっきの中国人が肅しゆくぜん然ぜんとして答えた。

「時間を間違えるな。すべていつもの通りにやってくれるんだぞ」
かしこま
 「畏りました」

閣下と呼ばれたその重症者の声音こわねは、たしかに聞き覚えのあるものであった。が、それが誰だか、直ぐには考え出せそうもない。

自動車は夫人と、その閣下と呼ばれる男と、家令のような中国人とをのせて、静かに動き出した。僕は三十一番街の方に駈け出した。同志に会って俄かに計画の大変更を決行しようというのである。それで元来た道の方へと引きかえした。一丁ほど走ると、カーンと靴先に音があつて何か金属製の扁ひらたいものを蹴とばした。探してみると、それは銀製のシガレット・ケースにすぎなかつた。そのようなものを検しらべて居る余裕はないから、捨ててしまおうとは思つたが、事件のあつた附近で発見したものだから、何か手懸りになるようなものが見当るかもしれないと思つたので、ポケットからシガレット・ライターを出して、その光の下に改めてみた。

「L・M！」

果然、頭文字らしいL・Mの二字が、ケースの一角に刻まれているのを発見した。L・Mとは誰であろう。尚もケースをひっくりかえしてみるうちに、遂に某大国の製品を示す浮き彫り眼についた。

「×国大使ルデイ・シューラー氏」

シューラー大使ならば二三度会ったことがある。あの温厚な元氣な大使に会って好きにならぬものはあるまい。殊に、あの朗々たる美音で、柄にもなくシューベルトの子守歌を一とくさり歌つてきかせたときなどは、満場大喝采であつた。だが、その温厚な大使も、僕にとつては、敵国人に違いはなかつた。その大使と、劉夫人とは、今日の有様では大變親密な間柄らしいが、

一体どうしたというのであろう。大使はあのまま劉夫人の邸宅ていたくへ向つたのであろうか。それとも、大使館へ逃げかえたのであろうか。僕は、まっしぐらに三十一番街へ駈け出した。

「おお、井東君。いよいよ×国と中国とが露骨な同盟を結ぶことになるらしいぞ。その盟約の調印を長びかせるとの指令が来た。

いま鳥渡ちよつと×国大使の車を三十一番街に追いこんだのさ。同志の仕掛けた爆弾を喰つてあのさわぎだ」

「ロボット
人造人間は、よく働かい」

「思ったより工合がいいなア、あの爆発さわぎの中で誰も怪我けがをせんかつたからなア。充分人造人間を活躍させてみせて奴等の恐怖心を養つて置いた。劉夫人も驚いてたろう」

「劉夫人と言え、オイ林田、計画は全部、建て直しだよ。チャンスは、今だ。正確に言おうと、このところ十五分間だ。この間にうまく頑張がんばつて呉れるなら、あとは僕たちの勝利だ。下手に行けば、明みょう朝ちようといわず、今夜のうちに僕たちの呼吸いきの根は止つてしまふことだろう。おい林田、もつと近くによれ！」

僕は劉夫人や×国大使に関する指令を発して、林田の援助を乞こうた。

「よおし、そうこなくちやならないんだった。恐ろしいことだが、僕たちが肉弾を以つてぶつかる目標きまが定きまつただけ、心残りがしなくていい。では同志、お互の好運を祈ろうよ」

僕たちは握手をしてわかれた。氷のように冷い同志林田の手だ

った。

かいりゆうクラブ
海龍俱樂部

へ入りこむには、会員各自に特有な抜け道がこしらえてあつた。会員は真黒な衣裳で、頭巾づきんも真黒、手にも真黒な手袋をつけねばならなかつた。会場へ入るには手頸てくびのところに入れずみ墨してある会員番号を、黙つて入口の小窓の内に示せばよかつた。だから僕にも「紅四べに」と朱色しゆいろの記号が彫ほつてあり、それは死ぬまで決して消えはしないのである。

僕は時間をはかり、すこし早や目の時刻に俱樂部へ着いた。会議室のホールには、ただ一人の先客があるばかりであつた。その先客は、だらしなく卓子テーブルに凭もたれたまま眠りこけていた。僕は、

そのうしろに廻つて、静かに抱き起こすと、別室に退いた。しりぞ

会議がはじまるときには、十三人の会員が全部揃つて、しゆくし 肅

ゆく、まるテーブル々と円卓子のまわの囲りをとりかこんだ。首領が立つて説明した会

議事項は、アジア亜細亜製鉄所に、空前のめいきゆう盟休めいきゆうが起ろうとしている

こと、なおその盟休は政治的意味が多分に加わつていて、所長の

保管する某大国との秘密契約書などを、今夜の深しんこう更十二時を期

して他へ移す必要のあること、それについて全会員が任務につい

て貰うこと、などであつた。団員は、それに対して、ただ唯、イエスノー諾か否

かを表示すればよい。首領以外の者は、絶対に口を利くことを許

されない規定であつたが、これは恐らく各団員の正体が決して知

られないこと、従つて団員は外あに在つて生活していても、けつし

て他から海龍倶楽部のメンバーであることを知られずにすむようにと、実に徹底した規定があるのであった。団員は会議事項の全部を承認した。首領は大変よろこんだが、引続いてその配置や実行方法について詳細なる説明を語りつづけるのであった。

そのとき、突然、首領の前に置かれた電話機が、けたたましく鳴りはじめた。首領は手をのばして受話機をとりあげた。電話の内容は、首領を驚かせるに充分だったと見えて、彼は右手で机をおさえ、辛うじて崩れ落ちようとする全身をささえている様子だった。電話が終ると、首領は俄かに厳肅な態度にかえって、団員一同を見渡すと、やがて静かに口を開いた。

「皆さん、今夜の決議事項は駄目になりました」首領の英語は常

に似ず朗かさを失っていた。「亜細亞製鉄所には既に暴動が起りました。製鉄所の建物は今猛火につつまれています。キューポラは爆発して熔鉄が五百メートル四方にとび散ったということです。この暴動の群衆の中に、奇怪なる人造人間が多数交つていて、いずれも挺身、破壊に従事したということです。次に命令です。失礼ながら皆さん、両手をあげていただきたい。おあげにならぬと、この私が銃丸をさしあげますぞ」一同は不意を喰つて驚きはしたが、双手を直ぐに挙げることに躊躇しなかつた。それは首領の射撃の腕前を、この部屋でしばしば目撃したことがあるからである。

「さて諸君、もう一つのニュースをおしらせする。それは副首領

の緑十八が、行方不明になったことである。緑十八は、先程から見まわすところ、この席上に出ていないようである。しかるに、ここに不思議なことがある。この会議にこうして出ている人数は、いつもの通りの十三人である。従つて、ここには一人の珍客ちんきやくがお出席になつてゐることと拝察する。皆さん、覆面ふくめんをとつていただきたい。その代り現倶楽部員は即刻、解任されたものと御承知願いたい」

僕は躊躇ちゆうちよなく覆面をかなぐり捨てた。それと同時にあちらこちらでも、覆面が脱ぎ取られ、その度に、意外な顔があらわれるのであつた。だが唯一人、覆面をとらぬ団員があつた。

「あなたあなたはどうしておとりにならない」

最後の一人は、両手を頭上にうちふって哀願しているようだったが、隣の男が素早くすすみよると、するりと覆面の布をひきはいた。

「呀ッ、ロボット人間！」

一同は同時に声を立てた。

ピューンと消音拳銃しょうおんピストルが鳴りひびくと、覗ねらいあやまたず、銃丸は眼窩がんかにとびこんだ。全身真黒なロボット人間がドタリと横に仆たおれた。「人造人間が死んだ」

誰かがそう叫んだ。ほんとに危いところだった。もうすこし気付きようが遅かったら、人造人間はこの部屋に爆弾の華はなを飾って、自分一人がのがれて行くかも知れなかった、と誰もが思ったこと

である。

「おお、血が垂れる。人造人間の血だ」と一人が頓とんきよう狂きやうな叫び声をあげた。

「人造人間の血はおかしい」

「早く内部なかをしらべてみる」

一同は人造人間をどう解剖したらばよいかとまどつたが、それは意外にも手軽ているに分解し、果然かせん、鉄の外がいひ皮ひがパクンと二つに開いた。その中には、歯車や電池がぎっしり詰つまっているかと思いの外ほか、身に軽羅けいらをつけた若い女の死体があつた。とり出してみると、それは劉夫人りゆうふじんに違いなかつた。

「おお緑十八、われ等が副首領」

首領が自らの覆面をとって、夫人の死体に縋りついた。それは兼ねて想像していたとおり×国大使ルデイ・シユーラー氏であった。劉夫人の身体は、まだ温かかった。首領が改めて僕の姿を探し求めたときには、僕は同志林田と共に、上^{シャンハイ}海の上空を飛ぶ飛行艇の内にあつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1931（昭和6）年1月号

※表題は底本では、「人造人間《ロボット》殺害《さつがい》事件」となっています。

入力：田浦亜矢子

校正：もりみつじゅんじ

2000年1月1日公開

2011年10月19日修正

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人造人間殺害事件

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>